
魔王候補生 A

神去無月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王候補生A

【Nコード】

N5439Z

【作者名】

神去無月

【あらすじ】

勇者が来なけりや毎日が退屈な魔界。そんな魔界で、危険を知らせる警鐘が突如鳴り響いた。それはつまり勇者が現れたということである。

しかし今現在、魔王様は部下の魔将たちを引き連れ慰安旅行中。うーん、勇者一行が来たときに重鎮不在では魔界の面子丸潰れ。というわけで、今から魔王の素質を持つ者を20人ほど募集してみる。それで新魔王を降臨させよう！

果たして魔王は誕生するのだろうか。そして、勇者登場までに間

に合うのだろうか。ていうか、現魔王が早く帰ってこいよ！

プロローグ

「……………」

少年は寝惚けたような口振りで、浮かんだ疑問を率直に呟きます。周囲は朽ち木と、ひび割れ不健康そうな土しかなくリアル荒野です。空を見上げればどんより灰色の曇天が。人間に例えるなら古代エジプトのミイラか引きこもり歴30年のヒツキーと言ったところでしょう。

「初めましてだな、魔王。ここは魔界だ」

少年の背後。仁王立ちで背中に翼を生やした少女が腕を組み、初対面なのにも拘わらず生意気にも上から口調で少年の疑問に応えます。

何様だよ。ちっぱいのくせに。少年は心の中でツツコミます。心は自由でいいですね。でも内心、可愛い女の子と出会って緊張しているようです。

さてさて、少女の胸の大きさは置いておき、気になるワードが出てきたではありませんか。

「魔王って僕？」

「正確には魔王候補だけだな」

「魔王、候補……」

魔王候補。少年はおうむ返しに呟きます。

つとと、なんだか思い出せないことがあるみたい。眉間に皺が寄

せられたと思いきや、情けなく八の字に眉尻が下がりました。

「……僕、俗に言う記憶喪失だと思う。さっきまで何してたか思い出せない……」

すると少女はけらけら笑いながら、詫びる素振りを一切見せることなく大胆な発言をしました。

「うん、私が消した。記憶消去なんて容易いな」

「うーわっ、この人なんて取り返しのつかないことしてくれちゃってんの？」

他人様の記憶を消すなんてどこの我が儘女だよ。親の顔がみてみたいね。少年は毒づきました。しかし声のボリュームが小さいことから、少年はヘタレ男子なのかもしれません。

まあ、そんな些細なことは少女には興味ありませんが。……多少、影響はありますけど。

「お前、名前は言えるか？」

「たてはし こめし楯橋木梨。……オイ、なんで名前は覚えてるんだよ」

「王道だからさ」

そんなドヤ顔をされても……、と少年改め木梨くんはリアクションに困ってしまいます。じゃあ、とりあえず笑いましょう。誤魔化すには笑顔が最適です。

「で、キミは？」

「私か？ 私は魔王候補生の指導係　小悪魔だ。悪魔子とでも呼んでくれ」

「悪魔子……」

「魔王選定試験日までよろしく頼むな、木梨」

嗚呼、なんとということでしょう。どうやら木梨くんは大変なことに巻き込まれてしまったようです。

魔王候補生に魔王選定試験。それと魔界。聞き慣れない単語がリフレイン。これは現実？ それとも夢の中？ 木梨くんは偏頭痛に襲われてしまいました。

「頭いてえ……」

「それは一大事だな木梨。ならば任せておけ、私が木梨を運んでやる」

「ど、どこに……？」

嫌な予感がしてたまりません。この感覚は、授業でわからない問題に限って先生に当てられるパターンに酷似しています。日付で解答者を決める方法は廃止するべきだと思えます。

悪魔子さんはダークな雰囲気を含む漆黒の翼を左右に広げました。その大きさは人間の背丈を優に超しているではありませんか。これは木梨くんもびっくりです。

「作り物じゃないのか」

「当たり前だろう。私の飛行技術はトップクラスだ、そんじょそこらと同等と思われるのは心外だな」

フンと得意気に言ってから、悪魔子さんは木梨くんを抱き上げました。俗に言うお姫様抱っこというやつです。

「うわっ、ちょ、何すんだよ！ 恥ずかしいから、これ結構恥ずかしいから！」

腕をバタつかせて抵抗するものの、悪魔子さんには効きません。木梨くんをしっかりと抱き締めています。

悪魔子さんはやれやれ、と溜め息をつきました。お疲れのようですね。

「誰も見ていない。気にするほどでもないだろう」

「そっいつ問題じゃないんだけど……」

「その他諸々、詳しいことは魔王候補生寮に着いてから話そう。では行くとするか」

(女の子にお姫様抱っこされるなんて……。身体が密着してて色々やばい)

顔を背けた木梨くんが内心で呟きます。その頬や耳が赤いことを指摘するのは意地悪で野望というものでしょう。

「ふふ。あまり暴れてくれるなよ？ つまらない景色を堪能しながら向かうとしようじゃないか、木梨」

1回、2回と翼を羽ばたかせ灰色の背景へと飛び立つ悪魔子さん。お姫様抱っこされている木梨くんはちょっとビビってるみたいです。

「あ、悪魔子、1つ教えてもらっていいか？」

「5つくらいでもいいけどな」

「……じゃあ2つ。魔王になれなかったらどうなるんだ？ それと、もし魔王になったら」

まだ木梨くんが喋っている途中でしたが、悪魔子さんが急激に上昇したため木梨くんは舌を嚙んでしまいました。ああ痛そう。

悪魔子さんは余裕綽々といった表情で、涙目の木梨くんに言いました。

「良い質問だ」

「舌嚙んだ……。い、良い質問なのか？」

「まあな、しかしそれらの答えは寮に着いてからにしよう」

ニヤリと不敵に笑う悪魔子さん。この瞬間、木梨くんは既に堪らなく嫌な予感しかしないのでした。

「……もう少し低く飛んでくれないか？」

「ん？ 怖いかな？ そう言えば先ほどから妙に抱きついてくるとは思っていたけどな」

「それは怖いよ！ バサバサするたびに揺れて、いつ落ちるか冷や冷やしてるし怖いんだよ悪いか！」

「落としたりなどしない。私に任せておけ木梨」

「……………悪魔子さん男前」

悪魔と名乗る少女に記憶を消去された楯橋木梨。どうやらこの少年、波乱に富んだ人生を送る羽目になりそうです。

どうやら魔王候補生になったらしい

初対面で女の子の悪魔子にお姫様抱っこをされるといふ恥辱を味わった木梨。恥ずかしいかもしれないことだが、異性の小悪魔に抱き上げられながら空を飛ぶなんてそうそう経験できるものではない。しかしこの木梨、実は灰色の景色なんてそっちのけで、悪魔子の微香ともちもちした肌の感触を堪能していたのは本人だけの秘密だ。

腰の上まであるさらさらと流れる綺麗なストレートの黒髪に、ワインのように深みのある紅色の双眼。衣装なんか、お腹の辺りが丸見えですらりと伸びる生足が見放題の、露出具合の高過ぎる格好だ。御年頃である木梨少年には些か刺激が強いことだろう。

「着いた。降ろすぞ」

「あ、どうも」

悪魔子から降りる木梨。ああ名残惜しい、もうあと少しもちもちすべすべの二の腕を堪能しておきたかったと木梨は残念がる。初対面なのに、いい根性をしている。

「立ち眩みが……」

「大丈夫か木梨」

おっと、木梨が自力で立つと少しふらついた。わざとではなく、彼は今調子が悪いのだ。悪魔子に支えられ、体勢を整えた。

さて、到着したのは、景色のあまり変わらない荒野の真ん中に丘に建つ大きな城だ。何もない荒野にそびえ立つ城は威風を放ち、い

かにもボス的な者がいる雰囲気存分に醸し出している。そんな城の城門の前に木梨と悪魔子は立っているのだが、門があまりにも大きいので2人が小石のように見えてしまう。

どんより曇った空の下、木梨は田舎から都会に出てきた若者のように辺りを見渡し、一言呟いたた。

「……ここはRPGの世界か何かなの？」

「あーるぴーじー？　なんだそれは？」

「あ、なんでもない。気にしなくていいと思う」

「そうか。それじゃ気にしないことした。本当は聞き慣れない単語に興味津々とか思っていないからな」

「……」

どうやら魔界にゲームの存在はないようだ。存在を知っていても多少複雑だけど。

それにしあって予想以上の食い付き具合だ。悪魔子は木梨が思っているより知識欲が深いのもかもしれない。

「……じゃあ、そのうちに機会があればね」

「わかった」

そう言えば、電気や水道はどうなっているのだろうか。ふと気に掛かったが、これから色々説明してくれるのだろう。木梨は黙って開いた状態の門の先を眺めた。

「ここが、これから魔王候補生を育てる施設　魔王誕生の城だ。
皆は『魔誕城』またんじょうと呼んでるらしいな」

「魔誕城ね。誕生とかけてんのかな」

「さあな。こつちだ」

興味なさそうに軽く流した悪魔子は門を通過し、城までの道のりをどんどん進んでいく。木梨は早足であとを追った。

砂利道を歩く木梨は、前に行く悪魔子が一步を踏み出す度にチラつく太ももを鑑賞する。後ろを歩いているのだから、悪魔子が振り向かない限りガン見していてもバレない。おお……！と、木梨は至福の一時を味わっているかのように満足げな表情を浮かべる。

（細身だけと僅かにあるムツチリ感が高評価だ。ラインも綺麗だし、ニーソとか履いてくれないかな。というか魔界にニーソ文化は普及しているんだろうか……。実に重要なことだけど、とりあえず撫で回したいなあ）

実際、至福の一時だったようだ。実に変態チックである。しかしこれが楯橋木梨、魔王候補生の思考なのだ。これが魔王になったらマズそうな気がしたのなら、節度のある常識人だろう。寧ろ支持してもいいかも、とか考えたやつは変態の仲間入りだ。おめでとう。

なんてことを考えているうちに、城内へ入る門へと到着した。先ほどと比較すると、だいぶ小さい。それでも軽く2メートル以上あるのだが。

悪魔子が「あ」と呟きを洩らし、背後に立つ木梨の方を見た。

「おっと、言い忘れてた。木梨は魔王候補生『A』だからな。覚えておいてくれ」

「Aって、評価？」

「いや、出席番号みたいなものだ」

「あ、そう」

さっきの発言はおこがましいかったかな。木梨は自分の思考にげんがりする。

なんだよ、Aって評価じゃなくて番号かよ。恥ずかしいじゃん。

「出席番号って、僕以外にも候補生がいんの？」

「うん、ざっと20人ほどかな」

「ふっん」

「興味あるか？」

重厚な木の扉がひとりで開く。悪魔子も木梨も、指一本触れていない。魔法か何かで自動的に動くような仕掛けが施されている可能性が高そうだ。

木梨は気怠そうな目を驚きに見張った。今まで半開きだったのかよじ。

「う、うん。まあ、それなりに」

そう木梨が答えたのと同時に、扉は完全に開いた。ズズン、と城内に音と振動が響き渡った。

先に悪魔子が城内へ足を踏み入れ、着いてこい、と悪魔子がクイクイと手招きをする。入ってもいいのだからうが、イマイチ気乗りしないのは、きつと嫌な予感がしているからに違いないだろう。

中々入ろうとしない木梨に、悪魔子は怪訝そうに眉を寄せる。

「そう遠慮するな。今日からここで生活してもらおうわけだし、個性的な連中が多いからすぐに打ち解けるはずだろう」

「個性的。それ、便利な言葉だと思わない？」

鼻で笑う木梨。皮肉のつもりだったが、悪魔子はけらけらと笑うだけだった。

「ああ。こういうときにぴったりで便利な言葉だ」

「……わっけわかんね」

「とりあえず入るといい」

「はいはい。そんなじゃ、お邪魔しますよっ」と

木梨が魔誕城の大理石の床を踏み締めた瞬間、背後の扉が勢いよく閉じる。こうまで力強く閉じられると、なんだか歓迎されていないんじゃないかと疑ってしまいそうだ。または短気なやつ、みたいな

こうなったら、いっそのことこいつらの言う通りに動いてみるの

も、それはそれで面白そうかも。

スプーン一杯の期待と、ナイフのように研ぎ澄ました警戒心を胸に抱きつつ、木梨は悪魔子のあとを着いていくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5439z/>

魔王候補生A

2011年12月20日00時50分発行